

2022年度  
関西学院大学ロースクール  
B日程

一般入試（法学未修者）  
特別入試（法学未修者）

論文問題

《10:00～11:30》

○開始の指示があるまで内容を見てはいけません。

## 【論文問題】

問題文を読んで、〔設問1〕、〔設問2〕および〔設問3〕に答えなさい。

〔設問1〕

下線部①において筆者はどのようなことを伝えようとしているか。幼い子どもが外国語を学習する場合に即して説明しなさい（100字程度）。

〔設問2〕

下線部②において筆者は「観念」をどのような意味で用いているか。言語の習得過程に即して説明しなさい（200字程度）。

〔設問3〕

筆者は、12歳あるいは15歳までの子どもには外国語教育を控えさせるべきだと主張している。筆者のこの主張に対するあなたの見解を述べなさい（500字程度）。

## 問題文

子どもの状態を尊重するがいい。そして、よいことであれ、悪いことであれ、早急に判断をくだしてはならない。例外的なものには、それがおのずからあらわれ、証明され、確認されるまでしばらく待ったあとで特別の方法を採用するがいい。長いあいだ自然のなすがままにしておくがいい。はやくから自然に代わってなにかしようなどと考えるのはならない。そんなことをすれば自然の仕事をやめることになる。わたしたちは時間というものの大切なことを知っているから、それをむだにしたくないのだ、とあなたがたは言う。時間のもちいかたをあやまることは、なにもしないでいることよりもっと時間をむだにすることになるということ、そして、へたに教育された子どもは、ぜんぜん教育をうけなかった子どもよりずっと知恵から遠ざかることが、あなたがたにはわからないのだ。子どもがなんもしないで幼い時代をむだにすごしているのを見て、あなたがたは心配している。とんでもない。しあわせに暮らしているのがなんの意味もないことだろうか。一日じゅう、飛んだり跳ねたり、遊んだり、走りまわったりしているのが、なんの意味もないことだろうか。一生のうちでこんなに充実した時はまたとあるまい。ひじょうにきびしい人と思われているプラトンは、「国家篇」のなかで、もっぱらお祭りや遊びや、歌をうたうこと、なぐさみごとをさせて子どもを育てている。子どもにみずから楽しむことを十分に教えることができたとき、プラトンはすべてをなしとげたことになるだろう。またセネカは、古代ローマの若者たちについて語りながら、かれらはいつも立っていた、かれらはすわって学ばなければならないようなことはなに一つ教えられなかった、と言っているが、そのためにかれらは、大人になって役にたたない人間になったろうか。だから、いわゆる無為な生活をそんなに恐れることはない。全面的に人生を活用するためにけっして眠ろうとしない人、そんな人がいたら、あなたがたはなんと言うか。あなたがたはこう言うにちがいない。この男は非常識な男だ。時を楽しむことを知らない。自分から時を捨てているのだ。眠ろうともしないで、死をもとめているのだ、と。そこで、いまのばあいも同じだということ、子ども時代は理性の眠りの時期だということを考えるがいい。

一見したところなんでもやすやすと学べるということは、子どもにとって破滅の原因となる。そういうふうにやすやすと学べるということこそ、子どもがなに一つ学んでいない証拠であることが人にはわからない。① なめらかに磨かれたかれらの頭脳は、ちょうど鏡のように、まえにある物体を映しだす。しかし、なに一つあとに残らず、内部にはいついかなない。子どもはことばを覚え、観念は反射されるだけだ。子どもの言うことを聞いている者にはその意味がわかるが、子どもにだけはそれがわからない。

記憶と推論とは本質的にちがう二つの機能であるとはいえ、それらはいともなわなければほんとうに発達しない。理性の時期のまえには、子どもは観念ではなく映像をうけとるのだ。そして②映像と観念とのあいだには、一方は感覚的な対象そのものの写しであるが、他方は、いろいろな関連によって規定される対象の概念である、というちがいがある。映像はそれを見る精神のうちに単独に存在することができるが、観念はすべて他の観念の存在を予想する。思い浮かべているときは見ているにすぎない。理解しているときはくらべているのだ。わたしたちの感覚は純粹に受動的だが、わたしたちの知覚あるいは観念はすべて、判断を行なうある能動的な根源から生まれてくる。このことはあとで証明することになる。

そこでわたしは、子どもには判断することができないのだから、ほんとうの記憶はないと言っておく。子どもは音や形や感覚をとらえるが、観念をとらえることはまれで、その関連をとらえることはさらにまれだ。子どもは幾何学の初歩を学ぶではないかと反論することによって、わたしの考えかたがまちがっていることを十分に証明できると人は信じている。しかし、それはまったく逆にわたしの考えが正しいことを証明している。つまり、子供は自分で推論を行なうことなどとてもできないのだが、かれらは他人の推論を理解することさえできないことを人は証明しているのだ。幼い幾何学者の方法をしらべてみるがいい。かれらはただ、図形の正確な印象と証明の用語を覚えているにすぎないことがすぐにわかる。すこしでも新しい困難が生じてくると、もうどうにもならない。図形をさかさまにしてみるがいい。もうどうにもならない。かれらが知ってることはすべて感覚的なものにかぎられていて、なにひとつ悟性にまで到達することはない。かれらの記憶そのものもほかの能力以上に完全なものとは言えない。どんなことでもたいてい、子どもの頃ことばだけを学んだことを大きくなってからもういちど学びなおさなければならないのだ。

(中略)

語学の勉強も教育にとって無用なことのひとつだと言え、読者はびっくりするだろう。しかし、ここで語っているのは幼い子どもの勉強についてだけであることを思い出していただきたい。そして、人がなんと言おうと、十二歳ないし十五歳までは、天才は別として、どんな子どもでも、ほんとうに二つの国語を学べたためしがあるとは信じられない。

言語の勉強がことばを学ぶこと、つまり、それをあらわす文字や音を学ぶことにすぎないなら、そういう勉強は子どもにふさわしいかもしれないと、わたしはみとめよう。しかし言語は、記号を変えることによって、同時に、それが表現する観念を変える。頭脳は言語に即して形づくられ、思想は慣用の語法の色合いをおびる。理性だけは共通のものだが、それぞれの国語によって精神は特殊の形態をもつ。その相違はた

しかに部分的にさまざまな国民性の原因あるいは結果となりうるものだ。そして、この可能性を確認しているように思えるのは、世界のあらゆる国民において、国語は習俗とともに変遷し、習俗とともに維持され、あるいは退廃していることだ。

そのいろいろな形態の一つを習慣が子どもにあたえる。そしてこの唯一の形態を子どもは理性の時期にいたるまでもちつづける。二つの形態をもつためには、観念を比較することができなければならないが、観念をもつ能力がほとんどない子どもに、どうしてそれを比較することができよう。一つ一つのものは子どもにたいして無数のちがったしるしをもつことができるが、一つ一つの観念はただ一つの形態しかもつことができない。だから子どもは、ただ一つの国語を話すことを学べるにすぎない。それでも子どもはいくつかの国語を学んでいるではないか、と人はわたしに言う。わたしはそういう事実を否定する。わたしは、五、六カ国語を話すことができるつもりでいるいわゆる天才児に会ったことがある。わたしはかれらがつぎつぎに、ドイツ語、ラテン語、フランス語、イタリア語で話すのを聞いた。なるほど、かれらは五種類か六種類の辞書をつかっていたが、いつもドイツ語でしか話していなかったのだ。一言でいえば、子どもにあなたがたの好きなだけたくさんの同義語を教えるがいい。単語は変わるだろうが、国語は変わらないだろう。子どもはただ一つの国語しか知らないだろう。

(以下略)

ルソー（今野 一雄訳）『エミール（上）』（岩波書店、1962年）より抜粋。出題との関係で必要な補足、省略、変更を施している。

2022 年度入学試験 出題趣旨・解説・講評

【B 日程：論文】

《出題趣旨》

一見自明と考えられる政策や制度であっても、別の観点からは異なる評価があり得る。本問は、教育をめぐる問題について、古典的な名著を素材として、読解力、思考力および文章表現力を試そうとするものである。

《解説》

【設問 1 に関する解説】

設問 1 は、下線部を契機として著者の論旨に対する理解力を問うものである。解答例については、以下の通りである。

幼い子どもは、大人に言われたとおり、発音や単語の辞書的な意味をオウム返しのように暗記し、大人に話すことはできるが、自らが発する言葉の一つ一つを概念ないし観念として相関的に理解することはできないこと。(この段落だけで 99 字)

【設問 2 に関する解説】

設問 2 は、文字通り、著者が用いる「観念」の意味について読解力を問うものである。解答例については、以下の通りである。

著者は、映像と観念を比較して、後者はいろいろな関連によって規定される対象の概念であるとしたうえで、観念はすべて他の観念の存在を予想し、理解しているときはくらべているのだとする。これを言語の習得過程に即して言えば、単に言葉の発音や意味を暗記するだけでなく、その言葉が用いられる文脈や他の言葉との関連はもちろんのこと、母国語たる観念との比較を通じて相関的に外国語の理解が深められることを意味している。(この段落だけで 198 字)

【設問 3 に関する解説】

著者の主張を前提に、それに対する自己の意見を述べさせることを通じて、問題文全体の読解力、思考力および文章表現力を試す問題である。

そもそも著者の主張を前提に立論することが求められているのだから、解答にあたっては、まずは著者の論旨を端的に確認しておくのが望ましい。そこに、問題文に対する理解力が反映されることにもなる。そのうえで自己の意見を展開するのであれば、論旨に一貫性がある限り、著者の立場への積極、消極いずれの立場で論じてもよい。あるいは、バランスをとって折衷的な解決もありうる。例えば、以下のような主張である。

筆者は、子どもが理性を身につける時期に至るまでは、すなわち 12 歳ないし 15 歳ころになるまでは一つの「観念」しか習得することができないから、国語も一つしか

習得できないと主張する。たしかに、この主張には一理ある。例えば現代の日本でも、小学校、中学校と英語を学んでも、必ずしも著者が示唆するような高いレベルで外国語を習得するわけではない。しかし、このような主張には、現代のグローバル化された社会の在り方に必ずしも適合しない面がある。すなわち、現代社会において外国人とのコミュニケーション能力を高めるには、幼少時からネイティブ・スピーカーとふれあう機会を設け、正確な発音やリスニング能力、ひいてはコミュニケーション能力を磨いておくことも有意義である。正確な発音は、むしろ柔軟な子どもの耳に早くから入れておいたほうが望ましいともいえる。筆者自身、幼い子どもでも「文字や音を学ぶこと」は可能であると認めている。また、仮に大人になってから学び直す必要が生じたとしても、子どものころに触れたことが全く無意味になってしまうわけではない。子どもへの働きかけを全て否定するよりも、その内容と方法を適切に取捨選択すべきである。(この段落だけで 501 字)

《全体的な講評》

---

設問 1 及び 2 については、読解力の出来・不出来がかなり明瞭に分かれた。例えば、理解が不十分な解答としては、単に問題文の記述を引き写したにとどまり、自分の言葉では十分に説明されていないものが多く見られた。他方、設問 3 の出来は相対的に良好ではあったものの、上記の解説で触れたように、いったん著者の論旨を確認したうえで論旨展開する答えは必ずしも多くなかった。著者の論旨を離れて自由に自分の意見や知識を展開する答えに対しては、「問いに答える姿勢が希薄である」という意味において、積極的な評価をすることは困難である。逆に、著者の論旨を的確に踏まえたうえで自己の意見を展開した答えについては、概ね高い評価がなされた。

以上